

## 第7回 JLPP 翻訳コンクール 英語部門講評

翻訳家、東京大学名誉教授  
柴田元幸

推した作品が選考委員それぞれ違って、審査には時間がかかったが、じっくり議論を重ねた結果、最終的には落ち着くべきところに落ち着いたのではないと思う。時間がかかったのはそれだけレベルが全体に高かったからとも言えるし、意地悪く言えばどの応募作も決定打を欠いていたとも言える。

まず、いわゆる「誤訳」ということでいえば、かなり少ない応募作がいくつもあり、正確さという意味では、日本文学翻訳者のレベルは確実に上がっているという感触を得た。翻訳は正確さより文章としての質、味わいが大事だとよく言われるが、正確さの裏付けを欠いた味わいを私は信用しない。その意味でこのレベルの高さは大いに勇気づけられた。

……と、言っておきながらすぐさまそれと反対のことを言うのだが、原文にここまでしがみつかず、訳文独自の声を作る、ということをもっと大胆に進めた方が結局は原文に忠実になれるんじゃないか、とほぼすべての応募作について思った。原文はどちらも、数行読んだだけで、ああ川上弘美作品の声だなあ、保坂和志エッセイの声だなあ、と感じさせてくれる。それをどこか彷彿させるようなトーンを、訳文でも作り出すのが理想である。もちろん言うは易く行なうは難し、なのだが。

もうひとつ、小説では、substandard な表現をどう訳すか、という問題がしばしば浮上する。今回の川上作品で言えば、あの不思議な生き物たちが喋る言葉。「こいつだめ」「なかなかだめ」……かなり多くの訳が、彼らにお行儀のいい、正しい喋り方をさせているのは非常に不満だった。こういうところが訳者の芸の見せどころなのに！と歯がゆい思いをした。

ただもしかしたら、コンクールへの応募ということで、声を作るのも、「間違っただけ」表現を奔放に訳すのも、皆さんやや慎重になったのかもしれない。日本でいわゆる「英文和訳」問題を採点していても、どうも日本語として堅いしギクシャクしているのだがまあいちおう間違っていない訳文は減点しづらく、思いきって意識して日本語としてメリハリを作っているのだがポイントが違ってしまっていると泣く泣く減点せざるをえない、ということになったりする。

最優秀賞のカミール・スパイチャルスキさんは、「夏休み」の原田さんの喋り方がリアルだった。“Looks like there’s no turning back now”（すっかりその気になられちゃったじゃないの）、“Spoken like a real parent”（すっかり保護者だね）といった訳文から、しっかり「私」の雇用主の声が聞こえてくる。「言葉の外へ」も、保坂さんの一筋縄では行かない文章の内容をよく咀嚼した上で、過度に簡略化したりもせず、可能な限り自然な英語で再現している。

「夏休み」の生き物たちの不思議な喋り方ということでいうと、たとえばキャサリン・レベッカ・マーさんの訳文で「ぼくいろいろだめなの」が“I’m all sorts of hopeless”になっているのにはとても共感した。こういう工夫・冒険がもっとあっていいと思う。

ダグラス・ヤーンさんは保坂エッセイの訳の質ということでは一番よかったと思う。文章にしっかり流れがあるのが強い。読んでいて保坂さんの顔が思い浮かんだ。まあもちろん、

著者の顔が思い浮かぶように訳すことが翻訳の目的ではないのだけれど。  
全体に、日本文学英訳の未来は明るい、と感じた。